



江戸絵画の世界
水の生き物

ジョナサン・バルコム著『魚たちの愛すべき知的生活―何を感じ、何を考え、どう行動するか―』「1 誤解されている魚たち」より

わたしたちは普段、なんの気なしに「魚」といっているが、ひと口に魚といっても、それはもう千差万別、多種多様な魚がいる。最大にして最もよく参照される魚類のデータベース〈フィッシュベース〉には、2016年1月現在で3万3249種の魚が64目564科に分類されて記載されている。この3万3249種という数は、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類を合計したよりも多い。ただ「魚」といっただけで、地球の脊椎動物の既知種のうち6割をさしていることになるのだ。

(中略)

脊椎のある生物は、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類の5つに分類されている。しかし、この分類は便宜的なものであって、厳密にはそうではない。ここには魚類の根本的な区別が表わされていないからである。硬骨魚類と軟骨魚類のあいだには、少なくとも分岐系統上は哺乳類と鳥類くらいの違いがあるのだ。マグロはサメよりもヒトに近縁だし、さらにいうと1937年に最初に発見された「生きた化石」、すなわちシーラカンスは系統樹上でマグロよりもわたしたち人間に近いところから分岐している。したがって軟骨魚類を独立させれば、脊椎動物のグループは全部で6つになるのである。

わたしたちが魚はみな近縁だと思い込むのは、一つには水中を効率的に動きまわるように進化した生きものとしてひとくくりにしてしまうせいだ。水の密度は空気の密度の800倍以上もある。そのために水中で生きる脊椎動物は抵抗を小さくしつつ推進力を生むように、筋肉質で流線形の体に平たい付属器官(ひれ)をもつものが多い。

密度の高い生息環境では、重力の負担が非常に小さくなりもする。水中では浮力がはたらくおかげで、水生生物は陸生生物を苦しめる重さから逃れられる。だから地球で最大の生物であるクジラは陸ではなく海に棲んでいる。ほとんどの魚が相対的に脳が小さい(体重に対する脳の重さの比率が小さい)理由もここにあるのだが、脳が大きい生きものほど高等だというわた

したち人間の思い込みのせいで魚はずいぶんと損をしている。魚が空気よりも抵抗の大きい水のなかをすいすい泳ぐことができるのは、大きく強い筋肉を発達させているからだ。実質的に重さを感じない環境に生きているなら、脳の大きさに対する体の大きさを制限することになんら特典はないのである。

(中略)

魚に関する最近の最も耳よりなニュースは、魚が何を考え、どう感じ、どのように生きているかについて発見がつついていることである。魚の生態と行動について新しい発見があったかと思うと、一週間もしないうちに次の発見がある。岩礁を注意深く観察すると、掃除魚と客のもちつもたれつの微妙な社会関係がわかってきて、魚など本能だけで生きている低能な生きものだという人間のえらそうな決めつけが否定される。よく魚の記憶力は3秒だといわれるが、これもまちがいであることが簡単な実験からわかっている。魚は知覚する能力があるばかりでなく、意識し、意志疎通を図り、社会性をもち、道具を使い、美德を備え、策略さえめぐらせる。このあとそこを見ていこう。

ジョナサン・バルコム著 『魚たちの愛すべき知的生活―何を感じ、何を考え、どう行動するか―』

桃井緑美子訳 白揚社 2018年



黒田稲卓 《鯉図》(部分) 国立アジア美術館 フリーア・ギャラリー